

## 「開目抄」ご執筆の二月に思う新刊-「御書根本」の大道-の不正

2026年2月28日

創価高・大学4期 図齊 修

(以下、赤青茶字、下線は図齊記す)



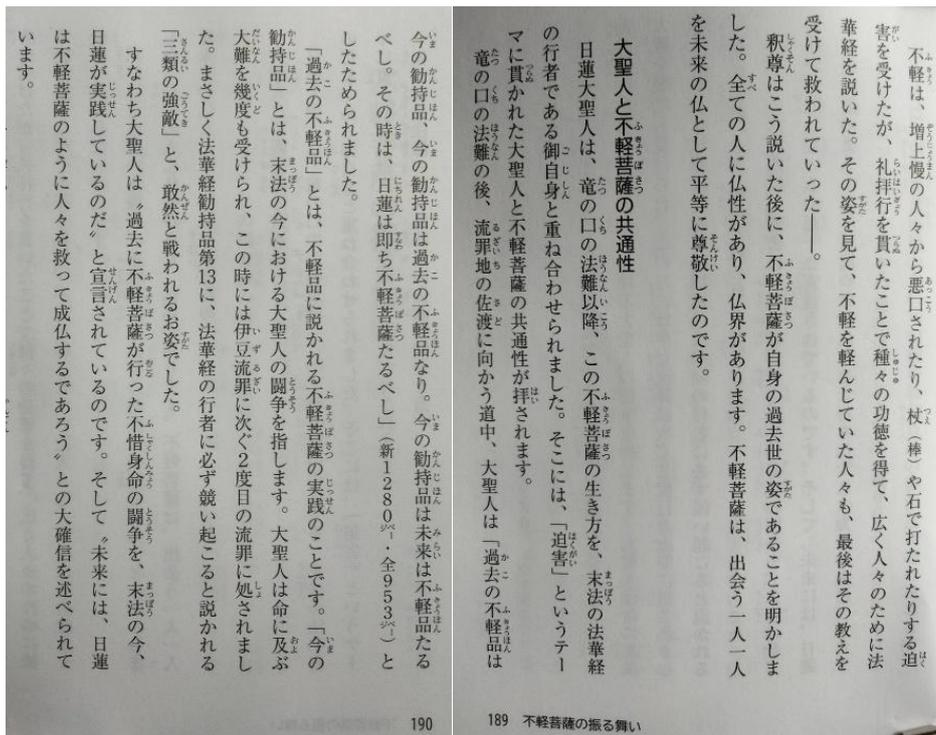
2月11日、戸田先生のご生誕日に発刊の一「御書根本」の大道-拝読と研鑽のために一を購入、心躍らせ読みました。読了後、まとも失望と悲しみに襲われました。それは、この本も池田先生が垂教された日蓮大聖人の御書の真義、奥義を全く無視だからです。750余年前、大聖人様が、厳寒の佐渡で生命を削られて執筆された**人本尊開顕の書「開目抄」**の御聖訓「**一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり**」を弁えない、単なる文上、不正の作文だからです。私は、この度の拙文も日蓮大聖人の弟子、そして、池田門下生の使命と責務を心肝に染め、以下、破邪顕正します。

「開目抄」講義第三章(池田大作全集第34巻)には -

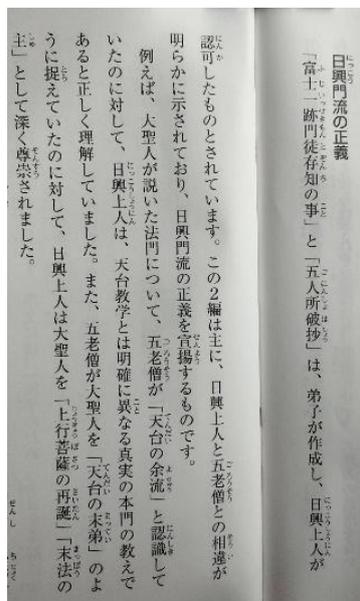
「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の**文の底**にしづめたり」(中略)この御文において日蓮大聖人は、「凡夫成仏」の鍵となる根源の法を「一念三千の法門」と呼ばれ、それが「但法華経の本門・寿量品の**文の底**」に秘沈されていると述べられています。「**文の底**」に秘沈されている一念三千とは、「一切衆生の成仏」を掲げる法華経の真髄というべき法理で、一言で言えば、「凡夫成仏の大法」としての十界互具・一念三千であると言えます。大聖人は、この**文底仏法**を説かれることによって、末法という悪世における民衆一人一人の根源的な救済の大道を開かれたのですと。

(私見)池田先生は、大聖人様のこの御聖訓を根本に、**御書を文底から縦横無尽に現代へ展開、教示された**と拝しております。ゆえに、池田先生のご指導に反するこの本の不正を論証します。

まず、この本では一日蓮大聖人は**不軽菩薩止まり**(189~190頁)、**日興上人**は大聖人を「**上行菩薩の再誕」「末法の主」として一止まり**(208、209頁)です。他にも邪義ありますが、この2つが最悪です。 1/7



(反証) 池田先生は**百六箇抄講義**で、以下ご指導です。一「百六箇抄」の原文では、大聖人の妙法弘通の文と不軽の修行を示す文のあいだに「手本には」と記されております。すなわち大聖人の本因の妙法を弘通するにあたって、不軽の修行を「手本」にすべきであるとの仰せと拝せる。「手本には」とは、そこ



から学ぶべきであるとの意味であります。**不軽の言動をそのまま末法の実践として取り入れるということではありません。**ちなみに、**不軽菩薩は、迹仏である積尊の過去因位の修行の姿にすぎません。**故に、不軽が事実のうえに妙法の当体をあらわすことができず、ただ理として衆生に内在する仏性を礼拝せざるをえなかったことは、今、述べたとおりであります。**日蓮大聖人とは仏としての力も資格も全く違っております。**それにもかかわらず、不軽の修行から何を学び取れと仰せなのでしょう。それは一言にしていえば、不軽菩薩が、種々の迫害にもかかわらず、上慢の衆生の生命に内在する仏性、妙法蓮華經に直接的に肉薄しようとした事実であります。

常不軽という名前自体が、一切の衆生の生命は三世常住の妙法の珠を包んだ尊極なる当体であり、決して軽んずべきではない、という内容をはらんでおります一と。 2/7

また、池田先生の「御義口伝講義」下399頁、常不軽品にも一不軽は、迹仏である釈尊の過去因位の修行の姿である。日蓮大聖人は御本仏であらせられる。ゆえに、その仏法の方軌においては、**不軽と大聖人とは、まったく一致するが、仏としての力、資格は、まったく違う**のである—とご教示です。

さらに、池田先生は「日興上人と五老僧の根本的な相違がここにある。すなわち、**日興上人は大聖人を悪世末法の衆生の闇を照らす根本の仏として仰がれた**」(2008年5月、大白蓮華700号特別寄稿、p52)—と、日蓮大聖人を不軽菩薩止まりになどとは全くされず、「**根本の仏**」とご指導です。よって上記のご指導により、**日蓮大聖人を単に不軽菩薩止まりにする書—「御書根本」**

**の大道-拝読と研鑽のために一は、理論的に不整合であり、不正の書**と断言します。

そしてさらに、この本は、池田先生の「諸法実相抄」講義、「生死一大事血脈抄」講義、「開目抄」講義等を紹介しており、そこで一日蓮仏法を現代社会に開く画期的な思想(204,205頁)—と記していますが、それらの講義は、まさに、**池田先生が御書を文底からご指導された講義**なのです。その点から、この本は、単に新版御書の紹介だけをしたとは言えないのです。故に、大聖人様を不軽菩薩止まりにして解説し、さらに同じく日興上人は大聖人を「上行菩薩の再誕」「末法の主」として深く尊崇した、とだけの論述も池田先生の講義に違背し、ご本意ではないと、私は破邪顕正します。

「諸法実相抄」講義(池田大作全集第24巻)には—諸法実相とは、一往は、諸法はそのまま妙法蓮華経という真実の姿であるという観照の哲学のようであります。が、再往、**文底観心のうえから言えば、御本尊こそ諸法実相**という大宇宙の縮図であり、**大聖人の仏法においては、諸法実相とは即御本尊の異名**なのであります—と。

また、「生死一大事血脈抄」講義 **人法一箇の当体** (池田大作全集第24巻)には—**久遠元初自受用報身如来たる日蓮大聖人の御一身に流れる生死一大事の血脈は、親から子へ血のつながるごとく三世にわたって御本尊を持ち、題目を唱える私達の生命に受け継がれていくのである(中略)大聖人の生命にある生死一大事の血脈を、私達はどうすれば相承できるか。大聖人御自身はすでにおられません。だが、大聖人は人法一箇の当体たるご本尊を残して下さっております。**—と。

(私見) 上記、池田先生のご指導より、この本においても御書を拝する究極の意義は日蓮大聖人の人法一箇の御本尊の偉大さを信心で捉えることです、と記すべきなのです。

\*\*\*\*\*

そして、そもそも論となりますが、私は今、以下の思いです。

「御書根本」の大道 - 拝読と研鑽のために一は、その冒頭に、**三大秘法抄**の写本発見について、一番最初に記すことが最も重要だと。その根拠として、ちょうどこの本の発刊日2月11日戸田先生のご生誕日に、私は一戸田先生のご生誕日に思う - 「教学要綱」の不正 <https://share.google/Inu9q7ntWOot0rmzV> を記し、その5,9頁に、**三大秘法抄**の重要義を記しました。

それを、以下引用、掲載しますが、この三大秘法抄により、この本の一番の使命は、新版御書を拝読するには、**池田先生の講義に従い御書を文底より拝読し、日蓮大聖人は久遠元初の自受用身如来であられ、人法一箇の御本尊様を、末代の私たちに遺して下さったのだと論述すべき、**だからなのです。それこそが、最新の知見に基づく学会員さんへの「御書根本の大道」であると、私は、断言します。

2.11 拙文 戸田先生のご生誕日に思う - 「教学要綱」の不正 の5頁には一

親友中村誠氏より以下の教示を頂きました。正論と拝します。

一三大秘法抄に関しての極めて重要な箇所は以下です。一「**寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊**」の「**五百塵点の当初より以来**」この箇所は超重要です。当初というのは古語で、それ以前という意味ですから、**五百塵点の当初とは無始、すなわち久遠元初を意味**します。一方で釈尊の場合、我本行菩薩道と經典にあるように菩薩の修行時代があり、始まりのある仏ということになってしまいます。

又、無作三身とあるから、金ぴかの釈尊ではなくなってしまう。又、本尊も、此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊、**即ち文底の教主釈尊ということ**になっってしまう。こうしたことから、**この御書は大聖人を本尊とするための日興門流による謀略書であるとされてきた**ということなのです。

そして、「教学要綱」では、この身延派の大崎ルールを用いることで、こうした御書たちの使用を回避して一**釈尊の本来の真実の境地（本地）は、無限の過去から無限の未来まで常に存在する「永遠の仏」（28頁）**—という**釈迦を根本仏とする身延流の邪義を、池田先生が許可されたという名目の下に作り出した**ということがいえます。しかし、**この度の古写本の発見により「教学要綱」のこの邪義が学問上から覆り、戸田・池田先生が遺された次の講義が正しかったことが証明**されるということがいえます。—「釈尊の久遠論は、まだ、有始有終であり、日蓮大聖人の久遠論は無始無終であられる」（御義口伝講義上, p. 512）「釈尊の本地は五百塵点劫であるが、日蓮大聖人の本地は五百塵点劫のそのかみ(それ以前)の久遠元初、すなわち無始の昔である」（『戸田城聖全集』第5巻 p. 460）—と。（私見）中村氏の論証、完璧であると拝します。

また、2. 11 拙文戸田先生のご生誕日に思う - 「教学要綱」の不正の9頁も、以下に引用掲載しました。

この三大秘法は、二千年の当初、地涌千界の上首として日蓮たしかに教主・大覚世尊より口決せし相承なり。今、日蓮が所行は、靈鷲山の麁水に介爾ばかりの相違なき、色も替わらぬ寿量品の事の三大事なり。

問う。一念三千の正しき証文いかに。

答う。次に申し出だすべし。ここにおいて二種有り。方便品に云わく「諸法の実相とは、いわゆる諸法の、如是相乃至衆生をして仏知見を聞かしめんと欲す」等云々。底下の凡夫理性所具の一念三千か。寿量品に云わく「しかるに、我は実に成仏してより已來、無量無辺なり」等云々。大覚世尊久遠実成の当初証得の一念三千なり。今、日蓮が時に感じて、この法門広宣流布するなり。

予、年来已心に秘すといえども、この法門を書き付けて留置かずんば、門家の遺弟等、定めて無慈悲の讒言を加うべし。その後は何と悔ゆとも叶うまじきと存するあいだ、貴迎に對し書き送り候。一見の後、秘して他見有るべからず。口外も詮無し。法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は、この三大秘法を含みたる経にてわたらせ給えばなり。秘すべし、秘すべし。

卯月八日  
大田金吾殿御返事  
日蓮 花押

(160) 三大秘法稟承事 1388

今この本門寿量の一品は、像法の後の五百歳の機なお堪えず。いわんや始めの五百年をや。いかにいわんや、正法の機には、迹門なお日淺し、まして本門をや。末法に入つて、爾前・迹門は全く出離生死の法にあらず。ただ専ら本門寿量の一品に限つて出離生死の要法なり。これをもつて思うに、諸仏の化導において全く偏頗無し等云々。

問う。仏の滅後、正像末の三時において、本化・迹化の各々の付嘱分明なり。ただ寿量の一品に限つて末法濁世の衆生のためなりといえる経文いまだ分明ならず。たしかに経の現文を聞かんと欲す、いかに。

答う。汝あながちにこれを問う。聞いて後、堅く信を取るべきなり。いわゆる、寿量品に云わく「この好き良業を、今留めてここに在く。汝は取つて服すべし。差えしと憂うることなかれ」等云々。問うて云わく、寿量品専ら末法惡世に限る経文顯然なる上は、私に難勢を加うべからず。しかるといへども、三大秘法、その体いかに。

答えて云わく、予が已心の大事これにしかず。汝が志無二なれば、少しこれを云わん。

寿量品に建立するところの本尊とは、五百塵点の当初より以來、此上有縁深厚、本有無作の三身の教主釈尊これなり。寿量品に云わく「如来の秘密・神通の力」等云々。疏の九に云わく「一身即三身を名づけて「秘」となし、三身即一身を名づけて「密」となす。また、昔より説かざるところを名づけて「秘」となし、ただ仏のみ自ら知るを名づけて「密」となす。仏、三世において等しく三身有り。諸教の中においてこれを秘して伝えず」等云々。

(160) 三大秘法稟承事 1386

上記「**三大秘法抄**」(新版御書1386, 1388頁)の最重要文に関して池田先生は「**観心本尊抄**」講義 **三大秘法抄** (池田大作全集第24巻)で、以下、ご教示です。—

「御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り、人とは釈尊に帰命し奉るなり、法とは法華経に帰命し奉るなり」と。ここに仰せの「**釈尊**」とは、文底独一本門の教主としての釈尊であり久遠元初自受用報身、末法御本仏**日蓮大聖人御自身**であります。(略)「**三大秘法抄**」で本尊を明かされている御文は「人」の面であります。いわく「**寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり**」—と。すなわち、**日蓮大聖人即人本尊**をご指導なのです！

\*\*\*\*\*

以上で一新刊「**御書根本**」の**大道-拝読と研鑽のために一への破邪顕正**を終えます。

あらためて記します。**日蓮大聖人様**が厳寒の二月、佐渡流罪時、人類のために生命を賭してご述作の**人本尊開顕の書「開目抄」**を、私どもが真に拝するならば、近刊—「**御書根本**」の**大道-拝読と研鑽のために一は、日蓮大聖人様と池田先生のお心に全く違背、不知恩の書**であると、私は断言します。

この拙文を親しき友人にお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご意見、ご指導を [kiiroibara.526@gmail.com](mailto:kiiroibara.526@gmail.com) にお問い合わせ申し上げます。敬具 凶斉修

\*\*\*\*\*

#### 補講

上記、私の拙文を読んで、親友中村誠氏から以下、寄稿頂きました。正論と拝します。ご紹介します。

開目抄の「文の底」という表現の意味ですが、極めて重要かつ深い意味を持ちます。これは文上という言葉と相対的な関係にあるもので、文の上に顕れていない秘された教え、ということがいえます。ようするに、法華経は二重構造であり、表面上からの読解ではその本意を知りがたく、文の奥底に真実が隠されているということが言えると思います。 6/7

事実、あの文章から大聖人が図頭された御本尊が頭れるなど、大聖人以外では、誰人たりとも知りようがないでしょう。それが**法華経「文底」の世界**です。それを**完全無視したのが教学要綱**です。それは次の表現からあきらかです。「大聖人は『開目抄』に『**一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり**』と述べ、『久遠実成が説かれた如来寿量品第十六の文の底に、「法華経」の肝心である一念三千の法門が示されていると洞察された』（同書, p.70） 「(一念三千は)『法華経』本門に示されている」（同書, p.112）

「示されている」これは、文の表面上から読み取れる法理という意味にしか解釈できず、文の底に秘し沈められた一念三千という、今までの創価学会の教学とはまるで異なるものであり、しかも間違った御文解釈です。ただ単に本門に示されているのであれば、一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の「文」に沈められている、とならなければならない。しかし御文は「文の底」です。意味がまるで違います。

この箇所を「示されている」と解釈したのであれば、「文底」という言葉はもはや有名無実であり、事実上「文底の法華経」を完全に否定したことと同じことです。そして行き着く先は当然、**釈迦を本仏とする世界観であり、これは身延のような五老僧門流と全く同じです**。しかもこの劣悪な解釈を、大聖人は～洞察された、という歴史的な事実仕立て上げ、日蓮大聖人及び池田大作先生監修という二重の絶対的権威を用いて、反対意見を絶対的権威で完全に封じ込めようとしています。この「大聖人は～洞察された」という箇所は、教学上は勿論、学術的な観点からも不適切であると問題視される可能性が高いでしょう。

こうした学術的に不適切な表現は、通常は peer-review でチェックされて削除されるのですが、それがなされていないということは、以下、須田晴夫氏の推測通り、この本は密室で作成されたとみなされても仕方がないでしょう。

「このように多くの初歩的な誤りや疑問点が散見されるのは、『教学要綱』がごく少数の密室的な議論に終始し、多方面からの検討がなされていないことを物語っている」 **須田晴夫、『創価学会教学要綱』の考察: 仏教史の視点から (p.105). Kindle 版.**